

松陰が涙した渡し場に 周防・安芸国境の橋

りょうごく 両国橋



夢路にもかへらぬ関を打ち越えて 今をかぎりと渡る小瀬川

吉田松陰が安政の大獄で江戸への移送時に、木野の渡し場で詠んだ歌ですが、周防・長門の人々にとって小瀬川を渡ることは故郷を後にすることでした。松陰は長門国の人でしたから小瀬川と詠んでいますが、安芸国では木野川と言っていました。松陰の渡った小瀬川が国境となるこの渡し場は、周防の小瀬村と安芸の木野村から出された3人ずつの渡し守が2人1組、昼夜3交代で務めました。ちなみに江戸中期の渡し賃は武士が無料、町人が2文、牛馬が4文徴収されていました。

明治になり関所が廃止され、渡河の不便を解消するために各地で橋の架設が盛んになると、この地でも橋の待望論がもちあがりました。そこで児玉駒之進ほかが発起人となって、渡し場のやや上流に木橋が計画され、大正10年(1921年)に、木野・小瀬・大竹の有志が工費3,500円で木造の橋を架けました。

周防・安芸の両国にまたがることから両国橋と名付けられたこの橋は、渡橋賃が1回1銭、月極め50銭という有料橋であったため、地元では賃取り橋、あるいは一銭橋と呼ばれていました。その後、洪水により幾度か架け替えられましたが、昭和11年(1936)に減価償却され木野・小瀬両村に無償譲渡され村営となりました。

昭和23年、両国橋は橋脚をコンクリートにした木造の吊り橋に架け替えられましたが、これも3年後のルース台風で流失してしまいます。そこで昭和29年7月永久橋で計画され、鋼橋に改めたことで現在までその姿を残しています。

しかし、完成して60年を経た両国橋は老朽化が著しいうえ、道路幅が狭く、車両の離合も困難をきわめていました。また、耐震性の面でも整備が求められていたため、平成27年から交通の円滑化と歩行者の安全確保を目的に、現道の拡幅並びに橋梁の架け替えが行われました。余談ながら、両国橋の名前どおり、現在も維持修繕は両県で行っています。

■位置図



木野の渡し場の名残である巻石護岸の西側に舟つきスロープが残っている



周防と安芸の国境は、現在山口と広島県の県境である



両国橋と新たに上流に架設された新両国橋



両国橋
(下路単純ポニーラス形式 L=78m W=4.5m)